

イギリス科学振興協会統計部会設置再考
— 経済学のエクスターナル・ヒストリーの試みとして —

The Foundation of the Statistical Section
of the British Association
for the Advancement of Science Revisited:
An Attempt at the External History of Economics

久保 真*

Inspired by the external-history programme proposed by Inoue (1988a), this article seeks to reconsider the manner in which the British Association for the Advancement of Science came to establish a statistical section at its third meeting at Cambridge in 1833. As is well known, this was realised as a “coup d’état” through the initiative of Malthus, Babbage, Jones, Whewell, and Quetelet, a Belgian mathematician who was invited there by Whewell before setting forth the “physique sociale” programme in his *Sur l’homme* (1835). Consulting his reports and correspondences gives that by 1833, Quetelet had almost arrived at that research programme — a statistical view of man as the underlying hypothesis of theoretical social inquiry — paying much attention to political economy as preoccupying that field of inquiry. The association, however, decided to confine the business of the new-born section to collecting data and offering “the raw material” to political economy, because it feared that theoretical approach to society would provoke “party animosity” among its members. The price of this decision was that an exception had to be made to the rule of the association: its avowed aim at the unity of science by philosophical speculation connecting all branches of science. As a result, the statistical section and, in addition, the statistical societies that followed it were able to only obtain and compile statistical data and had no impact on the discipline of political economy.

Shin Kubo

* フランス語で書かれた手稿類の読解について、藤田友尚氏（関西学院大学経済学部教授）より懇切なアドバイスをいただいた。感謝申し上げる。無論、残る誤りは筆者の責任である。なお、本研究は JSPS 科研費（25285066）の助成を受けたものである。

JEL : B12, B16

キーワード : イギリス科学振興協会、統計学、アドルフ・ケトレ

Keywords : British Association for the Advancement of Science, statistics,
Adophe Quetelet

一般的に言って、ある経済学の歴史的研究を行う場合、… 経済学自体の生成・発展・普及過程を明らかにするというインターナル・ヒストリー（従来の日本における経済学史研究が重視してきた研究分野なのだが）だけでなく、経済学のこれらの諸過程の進行を促したり、逆に阻止した経済的・政治的・社会的・文化的・知的環境など、さまざまな環境を明らかにするエクスターナリストによるエクスターナル・ヒストリーをも同時に明らかにしなければならない。（井上 1988a, 107）

I. 経済学のエクスターナル・ヒストリー——研究プログラムとして

井上琢智氏（以下、行論の内容上「井上」と記す）が、伝統的な経済学史研究の方法としてのインターナル・ヒストリーに對置させる形で、エクスターナル・ヒストリーというアプローチの必要性あるいはその重要性を説いたのは、1988 年の論考の冒頭においてであった（惹句参照）。そこで彼は、経済学者たちが向き合った政治・社会状況といったものだけでなく、彼らが身を置いた研究教育の場や彼らがメディアとした新聞・雑誌さらには個人宛ての書簡といったものをも、彼らの「環境」として一括し、そうした環境と経済学との関係を明らかにしようとするものをエクスターナル・ヒストリーとして特徴付けた。井上によれば、そうしたアプローチは、インターナル・ヒストリーの不十分さを補完するという意味で経済学史研究一般に必要であるだけでなく、とりわけ「19 世紀の中葉のイギリス経済学の状況を明らかにするためにはどうしても必要」だという。蓋し、この時期は「アマチュアリズムに支えられ… てきた古典派経済学が衰退」すると同時に、「経済学の専門化・制度化」に促される形で「近代経済学 [が] 成立」していったからに他ならない。前年に『ジェヴォンズの思想と経済学』（井上 1987a）を上梓していたことに思いを致せば、井上が

「近代経済学」と言う時ジェヴォンズを（他方「古典派経済学」と言う時、ジェヴォンズが痛烈に批判したりカードウやミルを）念頭に置いていたと推測しても、あながち的外れではないだろう。いずれにせよ、そうした経済学の専門化・制度化の事例もしくはそれらを促した要因として、イギリス各地で結成された文芸哲学協会や統計協会、ロンドンの経済学クラブ（Political Economy Club）、全国的な組織であるイギリス科学振興協会（British Association for the Advancement of Science）の統計部会（F 部会）など「民間の科学団体」の結成や活動を井上が挙げているのは、エクスターナル・ヒストリーという研究プログラムの具体的なプロジェクトを提示したものとも考えられる。

実際、こうした研究プログラムの一環と思われる論考を、井上はこの前後の時期に次々と発表している。まず、前掲書の第3章第3節（井上 1987a, 80-102）——「収録論文リスト」（281-2）を見る限り書き下ろしだと思われる——では、ジェヴォンズを取り巻いた知的環境という観点から、マンチェスター文芸哲学協会・ロンドン統計協会・マンチェスター統計協会・経済学クラブ・イギリス科学振興協会・イギリス社会科学振興協会（National Association for the Promotion of the Social Sciences）が言及されている。その後井上は、イギリス社会科学振興協会（井上 1987b; 1988a; 1988b）やイギリス科学振興協会統計部会（井上 1989）の歴史について、個別に検討を加えていった。さらに 1991 年に発表された小編の展望論文（井上 1991）において、「組織」——例えば「クラブ・協会」——が「経済学の普及と制度化」にいかなる役割を担ったかについて概観を与えている。が、その後の井上の主たる関心は日本経済思想史研究へ向かったためか、管見の限りこうしたイギリス経済学史における「組織」を主題とした論考は発表していない。

本稿は、経済学史研究におけるエクスターナル・ヒストリーの必要性もしくは重要性についての井上の提言に触発されつつ、イギリス科学振興協会、とりわけその第三回大会（1833 年にケンブリッジで開催）における統計部会の設置へと至る経緯を主題としたい。しかるに、これについては、井上（1989）を含めすでに少なからぬ研究蓄積が存在する（久保 2006, 75-6）。そこで本稿では、研究史上これまであまり重視されていない側面、すなわち、統計部会

の設置——これは、1832 年から 1852 年に至る「イギリスにおける統計運動」(Cullen 1975) の初期の一コマと位置付けられる——の国際的側面に光を当ててみたい。周知のように、統計部会設置は、マルサス(東インドカレッジ経済学教授; Thomas Robert Malthus, 1766-1834)、ジョーンズ(キングズ・カレッジ・ロンドン経済学教授; Richard Jones, 1790-1855)、バベッジ(ケンブリッジ大学数学教授; Charles Babbage, 1791-1871)、ヒューウェル(ケンブリッジ大学鉱物学教授; William Whewell, 1794-1866)といったイギリス人——「反リカードウ経済学」なる感情を多少なりとも共有するケンブリッジ大学の卒業生たち——がその立役者であったけれども、この大会にベルギーから参加した統計学者ケトレ(Adolphe Quetelet, 1796-1874)も重要な役回りを演じたとされる。では、いかなる経緯で、「近代統計学の出発点全体に関係していた」(江頭 2010, 297)ケトレはこの統計部会設置へも関わることとなったのか。はたまた、正統派経済学への反攻の拠点を生み出そうとしたジョーンズやヒューウェルが、老マルサスだけでなく、国際的名声を獲得しつつあった若き統計学者と連携しようとしたのはどのような思惑からであったのか。本稿は、こうした国境を越えたさまざまな思惑の交錯するものとして、統計部会設置をできるだけ史料それ自身に語らせる形で論じたい。それは、この時代の経済学に関するエクスターナル・ヒストリーを描くための準備作業となろう¹⁾。

本稿は以下のように構成される。まず第Ⅱ節で、その中に統計部会が設置されたイギリス科学振興協会が設立されるに至った経緯と、第一回ヨーク大会(1831 年)から第三回ケンブリッジ大会までの組織(特に、部会組織)の発展とを概観する。ここでは、この時期の協会を、目指すべき三つの方向性——科学の統合と開放と専門分化——の間での揺らぎあるいは緊張を示しているものとして特徴づける。第Ⅲ節では、ケトレがケンブリッジ大会に参加するように

1) なお、井上(1988a)の言う「エクスターナル・ヒストリー」は、ある特定の経済学(ないし経済学者)の歴史的背景というニュアンスが強いものに対して、本稿は、1830 年代におけるイギリス経済学の展開の一側面をエクスターナル・ヒストリーとして描くことを目指す。この点では、経済学のみならずさまざまな学問の 19 世紀イギリスにおける史的展開を社会的文脈から考察しようとする近年の動向が念頭に置かれている。そのような動向の具体例としては、ドーントンが編集した論文集(Daunton 2005)に結実した研究プロジェクトが挙げられよう。

なった経緯と、彼が抱いていた社会研究へ統計学を応用しようという構想がどのようなものであったかとを、彼の書簡やメモ類を参照しながら探っていく。ここでは、主著『人間に就いて』(Quetelet 1835)において提示された彼の「社会物理学」プログラムは、すでにケンブリッジ大会参加時点で事実上構想されるに至っており、そのプログラムがインパクトを与えるべき既存の学問として経済学を意識していた、ということが示唆される。さらに第IV節では、食い違うバベッジやケトレらの証言を突き合わせながら、統計部会設置の実相をできるだけ正確に再現してみよう。最後に、本稿で明らかになったこと——社会科学における人間像の刷新という設置の思想が貫徹できなかった次第一——に関連して若干の評言を行い、結びに代えたい。

II. イギリス科学振興協会 1831-1833 — 科学の統合・開放・専門分化

イギリスでは、18世紀末以降自然科学の専門学会が次々誕生していったが、他方でその中核となるべき王立協会(Royal Society)の沈滞ぶりは目を覆わんばかりであった。こうした科学の統合なき専門化という懸念すべき事態に対応せんがため、科学者たちを統合するプラットフォームを王立協会に代わって与えるべく1831年に設立されたのが、イギリス科学振興協会であった。統合の旗印は『学問の進歩(*The Advancement of Learning*)』の著者ベーコンのヴィジョンであり、その現代的に再解釈された科学方法論が「科学の進歩(*the Advancement of Science*)」を推進するものと期待された²⁾。ジョーンズ、バベッジ、ヒューウェルらの学生時代からの盟友であり、前年に王立協会の会長選挙に惜しくも落選した天文学者ハーシェル(John Herschel, 1792-1871)が、イギリス科学哲学の嚆矢とされる『自然哲学研究序説』を協会設立の年に世に

2) 本稿では、定訳に従い組織名を「イギリス科学振興協会」とする(例えば『ブリタニカ百科事典』『日本大百科全書』)が、前掲のベーコンの書名が含意された次第を考慮すれば、「振興」ではなく「進歩」と訳したほうがよいかも知れない。ただし、先行研究では、この協会の性格に関して「科学の進歩」と「科学の促進あるいは普及」という二つの目的の間にはある種の緊張があったことが指摘されている(Yeo 1981, 72-4; なお、後述のように、本稿では三つの方向性のなかに揺らぎない緊張を見出す)。ちなみに、組織名を「イギリス科学促進協会」と訳している井上(1989)は、協会の二重の性格を「専門[性]」と「開放性」として捉えている(460-1)。

問うたのは、象徴的であったと言えよう (Yeo 1981, 65-6, 82-3)。

イギリス科学振興協会設立の直接の契機となったのは、スコットランドの科学者ブルースター (David Brewster, 1781-1868) の提言であった。「彼は、バベッジの著書への書評の中で、政府および国民の科学への無関心、科学者への年金・報奨制度が確立していないことを指摘し、…ヨークシャー哲学協会 (1821 年創立) に BA [イギリス科学振興協会] の創立を働きかけた」(井上 1989, 460)。実は、このスコットランド人科学者の働きかけは、その著書『イングランドにおける科学の衰退に関する省察』がブルースターの書評対象となったバベッジが 1828 年に行った欧州旅行に端を発している (Snyder 2011, 139-43)。

この年の 9 月ベルリンに到着したバベッジは、当地で大陸の科学者たちによる盛大な会合が催されることを知った。実際、数学者ガウス (Carl Friedrich Gauss, 1777-1855) のようなドイツ人科学者のみならず、スウェーデンの化学者ベルゼリウス (Jöns Jacob Berzelius, 1779-1848)、デンマークの物理学者エルステッド (Hans Christian Ørsted, 1777-1851) から大陸各地からも錚々たる顔ぶれがプロイセン王国の首都に集結し、史上最大の科学者による会合となった。プロイセンの王族から一般市民に至るまで多くの人々が会場となった劇場へ詰めかけ、博物学者フンボルト (Alexander von Humboldt, 1769-1859) によるオープニング・スピーチに聞き入ったのである。会場に駆けつけたバベッジは、大陸の科学者たちの社会的名声、他方で彼らに対する社会全体の——とりわけ上流階級の——関心の高さに驚歎し、故国の科学者たちが置かれている嘆かわしい状況と比較せずにはいられなかったであろう。帰国するや否や、彼は旧知のブルースターにベルリンの会合の様子を伝える手紙を書き送った。これを読んだブルースターは、バベッジに、それを記事にまとめて自らの編集する『エディンバラ科学ジャーナル (*Edinburgh Journal of Science*)』に寄稿するよう勧めた。果たして、それは「ドイツの学会なるものに関する一般のイギリス人たち向けに書かれた最初の論説」(Babbage [1864] 1989, 324) となった。それを読めば、フンボルトのスピーチの内容 (英訳) や国別および分野別の出席者数などを知ることができる (Babbage 1829)。

こうしたやりとりのなかで、ドイツのそれに匹敵する学会をイギリスにも創ろうというアイデアが浮かんできたとしても不思議ではなからう。ハーシェルの会長就任が叶わなかったことも、王立協会を見限るよう二人を促したのかも知れない。ブルースターは 1831 年 2 月 21 日バベッジに以下のように書き送っている。

[ドイツの状況を知るにつけ] 7 月ないし 8 月にヨークでイギリスの科学者の会合が開ければ、イングランドにおける科学の大義は大きく前進するのではないか、というアイデアに強く惹かれるようになっていきます。… このアイデアを真剣に考えていただき、会長になるべきハーシェル氏に連絡をとって下さいませんか。王立協会ではもはや何ともしようがない状態のようです。… ですから、いまや総力を挙げて邁進すべき時です。この期に及んで、貴方が手を貸すことにたじろぐようなことは、ありませんまい。(Morrell and Thackray 1984, 33)

さらにその二日後、ブルースターはヨークシャー哲学協会の事務局担当者に、ヨークでの会合開催の可能性を打診している。

現在、第一回大会の準備が進んでおります。三王国 [イングランド・スコットランド・ウェールズ] どこからでももっともアクセスしやすいヨークで開催できないか検討されています。今回、以下の点についてご確認願いたく、ご連絡申し上げた次第です。出席者は恐らく 100 名を超えるかと思いますが、これだけ大勢の出席者に対して十分な宿泊施設がヨークにはありますでしょうか。[ヨークシャー] 哲学協会におかれましては、今回の準備に積極的に加わっていただけますでしょうか。… /学会の主要な目的は以下のようなものです。すなわち、科学を研究している人々をして情報を交換してもらい、彼らがお互いに刺激を受け新たな試みを始めるよう促すこと、科学の目的を一般の人々に開かれたものとする、そして、科学を振興しその進歩を加速させること、です。(Morrell and Thackray 1984, 34)

果たして、ヨークシャー哲学協会初代会長ハーコート (William Vernon Harcourt, 1789-1871) の協力よろしきを得て、1831 年 9 月 26 日月曜日、イギリス科学振興協会第一回大会がヨークにて幕を開けた (The British Association for the Advancement of Science 1833, 56)。ブルースターの予想を遙かに超

える 353 人の参加者を集めたこの大会は、イギリス史上最大規模の科学を主題とした会合となった。参加者たちは連日一堂に会して、さまざまな分野の近年の研究状況に関する講演を聞き、討議を行い、晚餐を楽しんだ。分野毎に専門委員会 (Sub Committees) が組織されたけれども、主として翌年の大会の講演者を執行委員会 (General Committee) へ推薦する役割を担ったに過ぎない。それはまさに、王立協会に代わって、さまざまな専門分野の知見を専門の垣根を越えて議論できるプラットフォームを提供する——先に引用したブルースターの言を借りれば、「科学を研究している人たちをして情報を交換してもらい、彼らがお互いに刺激を受け新たな試みを始めるよう促す」——という、趣旨に沿ったものであると見ることができよう。

他方で、「科学の目標を一般の人々に開かれたものとする」という目的は、第二回の開催場所が変更されたことで、結果的に達成されていく。すなわち、主としてアクセスしやすいという地理的な理由から第一回大会開催地が選ばれたにもかかわらず、そのヨークシャーの地で次回大会をオックスフォードで開催することが決定され、さらにその後の大会は、スコットランドのエディンバラ (第四回大会)、アイルランドのダブリン (第五回大会) など、イギリス各地を巡ることとなる³⁾。ヨウによれば、こうした「イギリス科学振興協会の巡回的な性格が、科学および科学者たちの全国的な可視性 (visibility) を高めていったことは、間違いない」。実際、バベッジやブルースターは、科学に対する一般の理解が欠如しておりその社会的ステータスが低いことが、イギリス科学の問題点だと考えていた。期待されていたように、いやそれ以上に、大会への一般参加者は増えていき、ブルースターのお膝元のエディンバラで大会が開催された時には、「[協会の大きな収入源であった] 女性向けチケットの人氣が凄まじく、応えきれない」と嬉しい悲鳴を上げるほどであった。科学は、順調にイギリス各地の——女性を含む——一般民衆の関心の的となっていくのである (Yeo 1981, 72-3; Morrell and Thackray 1981, 548; Snyder 2011, 154-5)。

しかしながら、こうした所期の目的に沿う形での発展が見られる一方で、それ

3) 第六回ブリストル大会は、初めて大学以外を会場として行われた。さらに後年、カナダのモントリオールでも大会が開催された (1884 年)。

とは必ずしも一致しないような発展も見られた。それは部会の形成である⁴⁾。すでに第二回のオックスフォード大会では、三日目(1832年6月20日水曜日)の総会の冒頭で、「四つの専門委員会の議長が、部会会合(Sectional Meetings)の議事録を読み上げた」ことが記録されている(The British Association for the Advancement of Science 1833, 99)。すなわち、参加者が一堂に会して講演を聴き討議を行う場とは別に、四つの専門委員会(Committees of Sciences)の下に、なんらかの形で部会会合が組織されていたのである(「地質部会(Geological Section)」という固有名詞も記録に現れる)。第二回大会は前回よりも多くの参加者(600人程度と推定されている)が見込まれていたことが部会設置の実際上の理由であったけれども、結果的にイギリス科学振興協会の場においても科学の専門化を迫認していくものとなった。こうした動きには、科学の統合を重視していたハーコートは強い難色を示した——そして恐らく、ババッジやブルースターも諸手を挙げて賛成ではなかった——けれども、その後の歴史を見れば「科学…の進歩」に資するものであったことに疑問の余地はないだろう(Morrel and Thackray 1981, 451-60, 548)。

1833年6月24日月曜日にケンブリッジで開催した第三回大会では、記録上初めて、部会会合が独立の項目として現れる。「部会は連日午前11時から、日によっては午後8時半からも、いくつかの校舎、天文学講義室、キーズ・カレッジ(Caius College)のホールを会場にして開かれた。土曜日には、自然誌部会はフェン(the Fens)までエクスカージョンに出かけた」(The British Association for the Advancement of Science 1834, xxxii)という。専門委員会は、①数学および一般物理学②化学・鉱物学等③地質学および地理学④自然誌⑤解剖学・医学等(新設)⑥統計学(新設)の六つが記されており(xxxix-xl)、その専門委員会に対応する六つの部会会合が火曜日から金曜日まで連日パラレルセッションの形で行われたということとなる⁵⁾。いや、実際には統計部会の

4) 井上(1989, 461)は第一回大会ですでに部会が設置されていたと述べているが、これは前述の専門委員会との混同であるように思われる(Morrell and Thackray 1981, 453)。

5) ただし、部会会合の記録は、部会毎ではなく、①数学および物理学②哲学用具および機械技術(Philosophical Instruments and Mechanical Arts)③自然誌・解剖学・心理学④科学史という四つの見出しの下に置かれている(The British Association for the Advancement of Science 1834, 353, 412, 433, 462)。

会合は「連日」行われたわけではない。というのも、会長セジウィック (Adam Sedgwick, 1785-1873) が六番目の部会として統計部会の設置をアナウンスしたのは、大会期間中 (27 日木曜日) の総会だったから。

大会期間中の突然の部会設置はある種の「クーデター」(Snyder 2011, 150) であったという。事実、27 日木曜日の総会で会長セジウィックから部会設置に至る理由や状況を説明するよう促されたバベッジは、「ルールを犯してしまったことに関して、これを前例としないことを条件に免責されるよう求め (asking for a bill of indemnity, for having broken the laws)」た (Anon. 1833, 82)。とはいえ、手続的瑕疵はともかく、イギリス科学振興協会が科学の統合と開放と専門分化という三つのベクトルのなかでいまだ揺れ動いていた時期に、統計部会の設置が行われたことに留意しておく必要がある。蓋し、統計学のみならず、数学・物理学・天文学に精通した国際的に名を知られる人物たるケトレの存在が、新たな部会設置 (= 専門分化) にもかわらず科学の統合を保証するアイコン (= 可視化された象徴) として機能した可能性を、我々に気付かせてくれるからである。クーデターに積極的に関与したと思われるのは、バベッジの他、マルサス、ジョーンズ、ヒューウェルらであったが、イギリス科学振興協会に関する浩瀚なモノグラフを著したモレルとサッカレー (Morrell and Thackray 1981, 291-2, 374) は、クーデターの成功はケトレの存在抜きには語れないと指摘する。事実、後述するように、バベッジは、総会でケトレの統計学の業績の重要性を聴衆に訴えることで、統計部会の設置を正当化しようとしたのであった (Anon. 1833, 82)⁶⁾。

III. ケトレ、ケンブリッジ、「社会学」と「経済学」

それでは、ケトレはいつ頃どのようにしてケンブリッジと関わりを持つに

6) ケンブリッジ大会の記録は、公式記録 (The British Association for the Advancement of Science 1834) とは別に、ケンブリッジ大学側の記録も出版されており、これには参加者のサインのコピーも収録されている (Anon. 1833, 1-61; ただし、編者や記録者が誰であるか本稿執筆時点では不明)。これによると、28 日金曜日の総会で会長セジウィックは、統計部会設置のアイデアをマルサス、バベッジ、ジョーンズ、ケトレの四人に帰している (Anon. 1833, 90)。なお、後述するようにヒューウェルも大きな役割を果たしている (Goldman 1983, 591)。

至ったのであろうか。

ベルギー王立アカデミーの付属図書館に所蔵されているケトレ宛て書簡を見る限り、ケトレとバベッジとの交流は遅くとも1826年11月には開始されている(Quetelet Papers 268)。しかし、ケトレが初めてケンブリッジを訪れたのは1827年のこと、オランダ国王(当時ベルギーはオランダ領)の命を受けて、ブリュッセルの天文台建設に必要な資材を調達すべく、イギリスへ渡ったときであったと思われる。これを機会に彼は、数ヶ月にわたってイギリス各地(グリニッジ・ケンジントン・エディンバラ・オックスフォード・リッチモンドなど)の天文台を訪れているが、11月ケンブリッジにも立ち寄っている(Quetelet and Garnier 1828, 313-29; 1829, 58-64)。そこでは、天文学者シープシャンクス(Richard Sheepshanks, 1794-1855)の厚意によって、天文台の細部に至るまで視察することができたという。ケトレが発表した出張報告を見る限り、天文台以外にもトリニティやセントジョンズなどのカレッジを訪れたらしいものの、シープシャンクス以外どのような人たちと交流をもったかは明らかではない(Quetelet and Garnier 1829, 62-4)。が、後の記録を見ると、この時ケトレがヒューウェルと知り合ったことが判明する。

その2年後(1829年9月)、ケトレはハイデルベルクで開催されたドイツ自然科学者大会(Deutscher Naturforscher Versammlung)に参加した。この大会には大陸各地からだけでなくイギリスからも数名の科学者が参加していたが、ケトレはそのなかにヒューウェルを見つけて感激した。というのも、「その2年前ケンブリッジ大学で、光栄にもお近づきになる機会を得ていた」からだという。シープシャンクスとヒューウェルはトリニティ・カレッジの同窓であり——ともに同世代の俊英と知られていた——、友人でもあったので、それが縁でケトレはヒューウェルを紹介されたのかもしれない。いずれにせよ、ヒューウェルの「機知に富んだ話しぶりやその広くかつ確かな知識のおかげで、ハイデルベルク滞在中の私 [=ケトレ] の楽しみはすこぶる増大した」(Quetelet and Garnier 1830, 233)のであった。

とはいえ、1820年代の両者の交流の実態はよく分からない。ケンブリッジのトリニティ・カレッジ図書館に所蔵されているヒューウェル文書のなかに

は膨大な書簡が含まれるが、オンラインデータベースを見る限り、そこに所蔵されているケトレからヒューウェルへの最初期の手紙は 1830 年 11 月 11 日のものである⁷⁾。他方、ベルギー王立アカデミーの附属図書館に所蔵されているヒューウェルからケトレへの最初期の手紙は、1832 年 5 月 15 日のものである⁸⁾。そこでヒューウェルはケトレに以下のように書き送っている。

貴殿と奥様のご健康で、貴国で生じた変化 [ベルギー独立直後の変化を指すと思われる] の間にも不便を感じずに逃れておられるのであればよいのですが、この気持ちをお伝えする機会ができたことは嬉しく思います。… 私はよくハイデルベルクで一緒に過ごした日々を楽しく思い出します。貴殿は恐らくご存じないでしょうが、大勢の科学者 (men of science) が毎年一堂に会するというドイツ流のやり方を真似ようとする動きが、イングランドの我々の間では始まっています。最初の大会はヨークで昨年開催されました。次の大会はオックスフォードで来月 6 月 18 日から 23 日まで開催される予定です。この大会に参加していただけるよう貴殿に [判読不能] する機会があればすこぶる嬉しいのですが。貴殿に来ていただけるとこちらの者も皆大層喜ぶだろうことは間違いありませんし、私は副会長のひとりですから頼りにしていただいて一向に構いません。

この招待は実現しなかったものの、ヒューウェルは翌年 (1833 年 4 月 2 日) ケトレに再び手紙を認め、イギリス科学振興協会のケンブリッジ大会への参加を促す。

ハイデルベルクで貴殿と私がともに参加したのと同じような科学者の年次会合がイングランドで始まっていることは、すでにお伝えしたかと思います。この会合は次回ケンブリッジで行われ、6 月 24 日に開幕します。貴殿がこの会合に参加くださること

7) オンラインデータベース (<http://janus.lib.cam.ac.uk/>) では、ケトレからヒューウェル宛の書簡 37 通の存在が確認できる (請求記号は Add.Ms.a/211)。ただし、これらの書簡について、本稿執筆時点では未調査である。

8) この手紙は、当該図書館所蔵のケトレ文書の資料番号 2644 のボックスに含まれている (以下、「Quetelet Papers 2644」のように略記する)。筆者が調査したところ、このボックスには、カタログ (Wellens-de Donder 1964, 144, 164) の記載と若干異なり、ヒューウェルからケトレへの英語での手紙 34 通の他、フランス語で書かれた署名のない手紙 1 通とヒューウェルに関するケトレによるフランス語のメモ (以下、「Note: Quetelet Papers 2644」と記す) が含まれている。

が可能だと分かれば、喜ばしい限りなのですが。もしおいでいただければ、貴殿の関心を惹くような多くの人や出来事に遭遇されることは間違いないでしょう。もし我々のところにおいでいただけるようでしたら、… [トリニティ・] カレッジのなかにアパートメントを用意しますし、貴殿の滞在が快適なものとなるようできる限りのことを致します。(Quetelet Papers 2644)

こうしたヒューウェルからの熱心な誘いもあって、ベルギー政府を代表するという形でケトレはケンブリッジ大会に参加することとなる。宿泊したのは、ヒューウェルが提供してくれたトリニティ・カレッジの部屋であった (Note: Quetelet Papers 2644)。

留意すべきことは、このようなやりとりと同時並行的に、ケトレがブリュッセルの王立天文台の建設に奔走し王室天文官に就任する一方で、天体観測に利用されていた統計学の理論 (誤差法則) や技法 (最小自乗法) を社会事象に適用していくという、後の「社会物理学」構想——かの『人間に就いて』(Quetelet 1835) に結実するアイデア——を徐々に形成していったと思われることである。そうしたアイデアの特徴は、社会統計によって特定の社会に内在する「法則」を導き出すことができるという実証的かつ決定論的志向と、そうした統計的平均から導出される「平均人」なる仮想的な人間をして道徳的「中庸」を体現させるという規範的志向とであった。

実は、1831年に発表した『異なる時代の犯罪傾向に関する研究』(Quetelet 1831)の冒頭において、ケトレはすでに、「社会物理学」ならぬ「社会力学 (mécanique sociale)」の基礎として、すなわち人間の物理的および道徳的特性の同定およびそうした特性の発展法則発見の基礎として、社会統計を使う妥当性を主張している。蓋し、社会統計によって到達される人間像こそそうした基礎となり得るからだ、とケトレは考えていた。

[そうした人間像は、] 社会の中で、物質界における重力の中心に喩えられるものである。あらゆる現象が社会全体から得られた平均値に従って生起するような、仮想的な存在である。もしある国の平均人なるものが確定されたとするならば、それはその国民の類型を提示するものとなろう。もしそれが人類全体について確定できるとすれば、

それは全人類の類型を提示するものとなろう。(Quetelet 1831, 1)⁹⁾

統計部会が設置される大会へと参加するためケトレがケンブリッジへ出発した時にはすでに、彼は単なる「事実を蒐集する統計学者」ではなく、社会法則を究明する「社会力学」の構想者であったのだ。だからこそ、同じく社会法則を究明する学としてすでに名声と権威を獲得していたイギリス経済学のメッカにも立ち寄ったのであろう。それはロンドンの経済学クラブであった。

ケンブリッジ大会の翌週の木曜日（1833年7月4日）、通常ならば6月までしか例会が開催されない経済学クラブで、特別会合（subscription meeting）がもたれた。この日は、トーク（Thomas Tooke, 1774-1858）が「工場で働く児童のために行われる立法による干渉は、健全な政策と矛盾しないか、矛盾しないとすればそれはいかなる修正のもとにおいてか」と題した報告を行い、それについて議論が行われた。クラブの公式記録に「[この会合には] 非会員に関するルールは適用されないこととなった」（Political Economy Club 1882, 114）とあり、通常例会よりも非会員に開かれたものとなったことが示唆されているが、それはケトレの参加を許可するためであったのかも知れない。が、ケトレはそうした出席許可手続の詳細については触れず、この会合への参加を以下のように報告している。

政治科学（les sciences politiques）にもっとも精通した人々がロンドンで学会を組織している。そこで彼らは自らの研究対象について議論し、知見を交換する。ここでの議論は実に科学的かつ友好的なものであり、通常 20 名から 30 名ほどが参加し、晚餐に引き続いて行われ、昨今の政治問題が話題となる。その学会のある日の会合では、工場における児童労働の問題を検討することが予定されていたが、それへの私の参加を認めたいという強い希望があった。この会合にはイギリスを代表する経済学者が何人も参加していた。マルサス氏、シーニア氏、トーク氏、ルイス氏、ウェイトリー氏、バベッジ氏などである。我が国のロンドン全権大使ファンデヴァイヤー（Van de Weyer）氏も、公務にもかかわらず自らの元来の研究対象に興味を失ってはいな

9) 『異なる時代の犯罪傾向に関する研究』は 1833 年に第二版が出版されているが、筆者は未見である。ただし、第二版を底本にした英訳版（Sylvester 1984）と初版を比較する限りでは、第二版に大きな改訂は施されていないように思われる。

かったので、この学会のメンバーとなっており、私の参加した会合にも参加していた。
(Quetelet and Garnier 1835, 16)¹⁰⁾

この経済学クラブが、ヒューウェルらが長く批判の対象としていたりカードウを中心に設立されたという事実を、ケトレが知っていたかどうかは定かでない。が、自らの仕事が経済学者たちの反響——肯定的であれ否定的であれ——を呼び起こすことを、ケトレ自身期待していたように思われる。事実、イギリス科学振興協会の大会へ参加する前年、ケトレは自らの著書(Quetelet 1832)をフランス経済学界の大御所セー(Jean-Baptiste Say, 1767-1832)に献本しているのだ。セーからの返信(1832年9月11日付け)はケトレが蒐集した統計データの有用性に必ずしも好意的なものではなかったけれども、若きケトレの野心を理解した上で教え諭するような調子で書かれている(Quetelet Papers 2231)。自らの「社会学」構想が従来の経済学研究へ何らかのインパクトをもたらすものとケトレがこの時期考えていなかったのであれば、パリのセーに著作を送ったりロンドンの経済学クラブを訪問したりすることなど、決してなかったはずだ。

IV. 統計部会設置(1833) — ケンブリッジのクーデター

こうした野心を携えたケトレが英仏海峡を渡って参加したイギリス科学振興協会の第三回ケンブリッジ大会で、統計部会設置は如何にして実現したのだろうか。これを伝える史料として歴史家がかつても参照してきたのは、1860年にロンドンで開催された国際統計学会第四回大会の報告書に掲載された、バベッジの書簡である。それによると、部会設置の経緯は以下のようであったと

10) バベッジは経済学クラブの会員ではなく、ファンデヴァイヤーはこの時点では会員ではない(会員になったのは1835年; 藤塚 1973, 308)。会員であるマルサス、トゥーク、シーニア(Nassau William Senior, 1790-1864)、ウェイトリー(Richard Whately, 1787-1863)の出席はクラブの公式記録でも確認できる(Political Economy Club 1882, 114; ただし「ルイス」が誰であるかは本稿執筆時点で確認できていない)。なお、カレン(Cullen 1975, 83)は、ケトレが帰国する前にロンドンに立ち寄り経済学者たちと晩餐を共にしたことには触れているものの、これが経済学クラブだとは特定していない。

いう。

イギリス [科学振興] 協会はまずヨークおよびオックスフォードでその初期の組織の発展を見たのであるが、その時には十分ではないように私には思われた。… あるまったく偶発的な事情によって、こうした不十分さのひとつを解消することができたのである。／ 1833 年のケンブリッジでの… 第三回大会の会期中のある日の午後、私は古くからの貴重な友人… リチャード・ジョーンズ師を訪ねた。彼は当時トリニティ・カレッジの部屋に宿を取っていた。彼が言うには、今し方まで我々の共通の友人であるケトレ氏とずっと話していたところだったという。ケトレ氏はこの大会に出席すべくベルギー政府から公式に派遣されて来ていたのであった。彼は一群の統計データを持参してくれたのだが、ジョーンズ師は、それを発表するに相応しい部会がないのでその夜 [再度] 自分のところに来てくれるよう依頼し、… マルサス教授やドリンクウォーター氏 [John Elliot Drinkwater Bethune, 1801-1851] [ら] … も誘って集まることとしたという。そしてその時私もその集まりに参加するよう求められたのである。私は喜んで誘いに応じた。が、[部屋を辞して] トリニティ・カレッジの門のところまで行くか行かないかというところで、ある考えが浮かんだのである。これは協会に貢献する好機ではないか。私は友人の部屋へとって返し彼に私のアイデアを話すと、彼は同意してくれた。私は統計部会の結成を提案したのだ。何か例外的なやり方をしない限り翌年の大会までそうした部会はできないだろうということに、意見の一致を見た。そこで、その夜集まった際に我々だけで暫定的に統計部会を結成することを考えようではないか、その後評議員会館での総会で、そうした事態になった次第とその部会を協会の永続的な部会とするメリットとを説明しようではないか、と私が述べた。… [実際思惑通りに] 総会では統計部会の設置が認められたのであった。(Babbage 1861, 505-6)¹¹⁾

だが、バベッジの記述を俄に信じることはできない。事実、ケトレをケンブリッジに招待したヒューウェルは、イギリス科学振興協会において統計学を扱うべきだという考えを、すでにこの年の 3 月 24 日の時点でジョーンズに告げていた。「イギリス [科学振興] 協会が統計データの蒐集に役立つようなもの

11) この書簡以外に、統計部会設置に関してバベッジが書き残したものは、『ロンドン万国博覧会 (1851 年)』(Babbage [1851] 1989, 10-11)、『自伝』(Babbage [1864], 325)、さらに国際統計学会の第一回大会がブリュッセルで開かれた際ケトレを訪ねたバベッジが残したとされているメモ (以下、「Note: Quetelet Papers 268」と記す) の三点である。このメモによれば、バベッジがジョーンズのもとを訪れたのは「朝」であったという。

へ組織変更される予定ならば、そうしたデータの蒐集についても貴方と話し会いたいと思います。組織変更したほうが適切だろうというのが私の考えです」(Whewell Papers, Add.Ms.C.51.154; Todhunter [1876] 2001, 161)。また、バベッジの自己言及は往々にして自らをよく見せようという潤色が施されているという指摘もある (Snyder 2011, 378)。これらからすると、統計部会設置はバベッジ単独による大会会期中の思いつきではなく、ケンブリッジで大会が開催される前からジョーンズやヒューウェルらと連携しながらそのアイデアを発展させていったと見るべきだろう。

ドリンクウォーターの日記やメモ類に基づいた二次文献 (Cullen 1975, 79, 82; Goldman 1983, 591-2) によれば、統計部会へと発展する会合は複数回——少なくとも、6月26日水曜日(時間不明)と27日木曜日(午前)の二回——もたれたようである。前者の会合については不明であるが¹²⁾、後者の会合では、マルサスが議長を務め、ケトレがベルギーの犯罪統計に関する報告を、バベッジは正規分布やその社会現象への適用に関する報告を行った。さらに、「部会設置の見込みやそのための最も望ましい方法などが話し合われた」。出席者は30名を超えたという。

筆者はドリンクウォーターの日記やメモ類を未だ調査していないけれども、ケトレの出張報告では、確かに、こうした非公式の会合が複数回開催され出席者が増していったことが記されており、上記ドリンクウォーター史料の記述と矛盾しない。

ケンブリッジ [の大会] では、開催されるどの委員会もこの科学 [=統計学] を扱う予定はなかったので、我々 [ケトレとバベッジ] はすぐに集まってマルサス氏やジョーンズ氏——お二人とは名誉なことにすでに面識があった——と議論することとした。これらの全く内輪の会合 (ces conférences toutes particulières) は、それに参加したいという希望を述べる者も複数いたので、すぐに多くの人の参加を認めるようになり、

12) 26日夜ジョーンズは、ケトレ、ヒューウェル、バベッジ、マルサスらをキーズ・カレッジの自分の部屋に集めた、とスナイダー (Snyder 2011, 151) は書いている。そこでは、ケトレが報告をただけでなく、ヒューウェルとジョーンズが統計部会を創るという計画を居合わせた人々に告げた、という。しかし、スナイダーは証拠を一切挙げておらず、筆者も本稿執筆時点ではその証拠を確認できていない。

その結果、協会は統計学のために六番目の委員会を総会で認めたのである。(Quetelet and Garnier 1835, 14)

さらに、ケトレはヒューウェルとの思い出を記したメモのなかで、後続した会合は実質的なものというよりも、総会において新たな部会として認めてもらうための戦略的なものであったことを示唆している。

この質素な部屋 [=トリニティ・カレッジ内にヒューウェルが用意してくれた部屋] において、もっとも傑出したイギリスの統計学者たちが集まり… 会談が行われた。さらにその後、その他の学問領域と遜色ない地位を占めるために、大会の他の部会に配慮し儀礼に則して (*avec courtoisie pour les autres sections de l'assemblée*) 会合がもたれた。(Note: Quetelet Papers 2664)

27 日木曜日の総会を前にして、他の部会と同様な形式だがあくまで暫定的なものとして統計部会会合が開かれたのだろう。マルサスが議長を務め、ケトレやバベッジが報告を行った際、30 名ほどの参加者だけでなく、総会に出席するであろう他の一般会員たちへのデモンストレーションが意識されていたはずだ。

こうした周到な準備を経て、会長セジウィックは総会が評議員会館で午後 1 時に始まるや、真っ先に統計部会設置の件を切り出したのであった¹³⁾。

皆さんご存じのように、[本大会は] 総会に加えて別個の部会が五つ設けられており、それらの部会でのやりとりの記録がすでに [総会で] 報告されています。昨年のオックスフォード大会では四つの部会しか活動しませんでした。これだけでは実際不都合があるということで、解剖学および生理学を主題とする五番目の部会が追加されたわけです。今や、それら五つの部会でも不十分だということになりまして、新たな子供の誕生——それは昨日の産物なのですが——をアナウンスしたいと思います。通常の手続から若干逸脱していることは認めなくてはなりませんが、極めて傑出した方々の協賛を得て、第六部会が結成されたのです。(Anon. 1833, 82)

13) 奇妙なことに、協会の公式記録には、27 日木曜日の総会での統計部会設置のアナウンスメントおよびその後のやりとりは一切記されていない (The British Association for the Advancement of Science 1834, xxvi-xxvii)。

セジウィックは、このように述べると、マルサスとバベッジの二人に部会結成の理由や状況を説明するよう求めた。マルサスがどのような発言をしたのかは記録されていないけれども、方やバベッジは、先述のように、「ルールを犯してしまったことに関して、これを前例としないことを条件に免責されるよう求め」た上で、第六部会が主題とする統計学的研究は大きな重要性を有していることを力説した。彼は、「そうした研究はこれまで一人の傑出した外国人が振興してきたのですが、その方は一群の極めて価値ある情報をお持ちです」と述べてから、ケトレが持参した統計データの詳細について解説し始めた¹⁴⁾。しかし、これは一般会員に提案を受け入れてもらうためではなかった。総会でバベッジは「既成事実」（井上 1989, 462）として部会設置の正当化を図ったのである。もし「既成事実」として総会に提示しなかったならば、すなわち、もし部会設置を認めるよう総会で提案したならば、「我々は成功することはなかったであろうと [いう] 確信」がバベッジにはあったからだ (Note: Quetelet Papers 268)。

執行委員会——翌 28 日金曜日の朝開催されたと思われる——で、統計部会および統計専門委員会の設置が認められた。が同時に、「この部会は、その研究について、数字によって表現することができ、かつ十分な量が集められれば必ず一般法則を示すような、人間社会に関する諸事実に限定されるべきこと」(The British Association for the Advancement of Science 1834, xxxvii) が決定された。同日午後の総会で会長セジウィックは、この部会が正式に発足したことを宣言した。とはいえ、「このような部会の設置を黙認したことに不安を感じたセジウィックは、統計部門の議事録の受取を拒否し、この部会設置の黙認によって受けたダメージの払拭を図るために、BA [イギリス科学振興協会] が取り扱う科学とは何かについての演説を行つ」(井上 1989, 463) ている¹⁵⁾。セジウィックによれば、「道徳や政治に関する科学は、我々の哲学的思

14) ただし、記録者は、バベッジによるケトレの業績の詳細説明について、「正確な報告ができるほど、ちゃんと理解することはできなかった」(Anon. 1833, 82) という。

15) セジウィックは、「昨日のアナウンスはまったく不適當なもので、それは動転してしまっていたからというものもあるが、主として、[マルサス、バベッジ、ジョーンズ、ケトレといった] 偉大な人物たちの名前を尊重してしまつたからだ」と述べる。そして、その日の午前中、総会で読み上げられるべく統計部会の報告書が上がってきたが、その夜再招集される執行委員会に差し戻した、という (Anon. 1833, 90)。

索の及ぶ遙か上方にある」のであって、統計研究が協会の一角を占めるとすれば、それは「経済学や政治哲学に対して生の素材と呼ばれうるものを提供する」限りにおいてである。道徳や政治に関して一般化をしようとすれば、必然そこには人の「偏見」や「党派的对立感情 (party animosity)」が入り込むことによって果てしない論争を惹起し、協会そのものを破壊しかねないだろう (The British Association for the Advancement of Science 1834, xxviii-xxix)。

とはいえ、協会が振興すべき「科学」が人間社会と無関係だとセジウィックが考えていたわけではない。彼にとって、究極の目標たる人類の道徳的改善は——少なくとも現段階では——道徳科学の進展によってではなく、自然科学の統一によって図られるべきものであった。自然科学の諸分野の知見が哲学的推論によって関連づけられることによって、物的世界の統一的理解へと至ること、さらに、それによって人類の道徳的改善に資することが想定されていた。他方「道徳・政治諸科学は、その重要性において物理諸科学を完全に凌ぐ」ものではあるけれども、その「正しき」において未だ遙かに及ばないものである以上、協会では統計部会をして「生の素材の提供」にその活動を限定させるべきだ、というのであった (xxx-xxxii)。かくして、イギリス科学振興協会における統計研究は、その部会設置の経緯がイレギュラーであっただけでなく、科学の統合という協会の理念からしてもイレギュラーなものと思われることとなった、と言うべきであろう。当時そうしたことが問題視されなかったのは、ベルギーの王室天文官——ヒューウエルの基調講演では、天文学は諸科学の女王であった (Snyder 2011, 2) ——が統計部会設置の中心にいたことで、科学の統合がかろうじて人的に保証されたかのように思われたからかも知れない。いずれにせよ、統計部会は社会現象に対する理論的考察を行わないこととなり、統計部会の関心も人口などに関する正確なデータセットを作成することに向かうこととなった。が、こうした事態の推移は、ケトレにとって必ずしも望ましいものではなかったように思われる。

協会は統計学のために六番目の委員会を総会で認めた。が、統計学を純粋に数字に関わる役割に限定してしまったのである。(Quetelet and Garnier 1835, 14)

[こうした統計データは] 学識のある人物の手 (mains habiles) に委ねられれば貴重な素材となるであろうし、我々の望むような形で利用可能となるであろうに。(16)

ケトレはこの一文によって統計部会が設置されたケンブリッジ大会の報告を締めくくると、経済学クラブ訪問の報告へと筆を進めている。あたかも、「社会学」構想をすでに抱いていたケトレが、「経済学へと生の素材」を提供するという限定された役割について失望しながら、「学識のある人物」を求めて経済学クラブを訪れたことを仄めかすかのように。

V. 結びに代えて

イギリス科学振興協会第三回大会は、その後イギリス各地に生まれた統計協会の嚆矢となる統計部会を誕生させたことのみをもって、歴史家たちに注目されてきたわけではない。そこではもうひとつ重要なものを誕生させた。「科学者 (scientist)」なる語彙である。

6月25日火曜日、ヒューウェルが科学の現状について、800人を超える聴衆に向けて報告を行った。この大会の基調講演と言うべきこの報告の趣意は、科学研究において事実も理論も共に重要なのであり、観察と推論とが有機的に結びつくことによって科学を前進させることができるのだ、というものであった。

この報告に対して、フロアから発言を求めたのがロマン派の詩人、老コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) であった。その調子は驚くほど辛辣であったという。曰く、この大会に集っている連中は「自然哲学者」を自称するけれども、「哲学者」の名に値する者がこの中においてになるのだろうか。あなた方は化石の発掘だの電気実験だのにかまけておいでだが、「哲学者」がなすべきは森羅万象の不思議について沈思黙考することのはずだ。真正の形而上学者たる私からすれば、あなた方が「哲学者」を名乗るなど笑止である、と。これに対して、ヒューウェルは再び立ち上がり、どよめく会場を制して述べた。その著名な紳士のおっしゃるとおり、我々会員たちを総称するぴつたりの言葉はないようだ。もし「哲学者」というのが余りに広く傲慢に聞こえるのなら、「科学者」と呼んではどうだろうか、と (Snyder 2011, 1-3)。

科学史の画期をなす瞬間であった。だが同じ大会で統計部会が上で見たようにその目的に限定が加えられた形で設置されたことを思い起こせば、こう問うてみたくなる。もし——ヒューウェルの理想としたように——「科学者」が事実を蒐集すると同時に理論化をも行う存在だとすれば、ヒューウェルがその設置に貢献した統計部会は当初より「科学者」たちの活動の場たり得なかったのではないだろうか。事実、ヒューウェルは、『人間に就いて』献本への礼状のなかでケトレに以下のように書き送っている。

[イギリス科学振興] 協会の統計部会はダブリンで会合をもち、重要な報告がいくつかなされました。… [統計部会によって 1834 年に設立された] ロンドン統計協会は大会に向けて大部の問題集を配布するために作成しました。会員たちは間違いなく多くの情報を手にするでしょう。ですが、そのなかに熱心な理論家がいたほうがうまくいくだろうに、というのが現在の私の考えです。(Quetelet Papers 2664; Todhunter [1876] 2001, 2: 228-9)

ヒューウェルは、ケトレの仕事が正統派経済学の排撃という然るべき目的に活かされるためには、統計部会の限定されたあり方は全く不十分だと考えるようになっていた。確かに、1830 年代の統計研究が正統派経済学の地位を脅かすことはまったくできなかった、と言ってよい (久保 2006, 76)。

だが、興味深いことに、ケトレの仕事は、反正統派の経済学を構想したジェヴォンズに 1850 年代以降大きな影響を与えることとなる。井上 (Inoue 2012; 井上 1988a; 2013) によれば、ジェヴォンズは、統計学者もしくは計量経済学者としてだけでなく、経済学方法論さらには経済学における人間観についても、ケトレから大きな影響を受けていた。そうした影響は、1830 年から 1849 年に至るヨーロッパ各国における統計調査の制度的整備およびそれを通じて集められた膨大な統計資料の出現という時代状況——「統計運動」の時代、もしくは「統計熱狂時代」——という史的文脈から理解ができるという。

しかしながら、本稿で提示した「エクスターナル・ヒストリー」が示唆しているのは、中産階級の社会改良熱に結びつくかたちで展開されることとなったイギリスの「統計運動」であったけれども、その始まりは、社会科学における

人間像の刷新を目論んだ「科学者」たちの思想が協会内部の意思決定における妥協によって貫徹できなかった結果であったということだ¹⁶⁾。このことからすると、ジェヴォンズは、計量経済学者としては「統計運動」という時代の子であったけれども、経済学における人間観については「統計運動」がまさに始まろうとした時に封印されてしまった思想に触発されたのだ、と理解することができよう。しかるに、こうした触発が、結果的にジェヴォンズをして『人間学』としての経済学から『生きた人間』を捨象」（井上 2012, 1）せしめたとすれば、それは歴史の逆説と言えるのではないだろうか。

参考文献

Quetelet Papers, in Académie royale des Sciences, Lettres et Beaux-Arts de Belgique.

Whewell Papers, in Wren Library, Trinity College, Cambridge.

Anon. (1833) *Lithographed Signatures of the Members of the British Association for the Advancement of Science, Who Met at Cambridge, June M.DCCC.XXXIII. with a Report of the Proceedings at the Public Meetings during the Week and an Alphabetical List of the Members*, Cambridge: The University.

Babbage, C. (1829). “Account of the Great Congress of Philosophers at Berlin,” *Edinburgh Journal of Science* 20: 225-34.

Babbage, C. ([1851] 1989) *The Exposition of 1851*, 2nd ed. In vol. 10 of *The Works of Charles Babbage*, edited by M. Campbell-Kelly, London: William Pickering.

Babbage, C. (1861) Letters from Charles Babbage, Esq., F.R.S., &c. &c. In *Report of the Proceedings of the Fourth session of the International Statistical Congress, Held in London July 16th, 1860, and the Five Following Days*, edited by W. Farr, London: G. E. Frye and W. Spottiswoode, 505-7.

16) イギリス科学振興協会における統計部会設置を推進した「思想」と、その後イギリス各地に設立された統計協会の性格との懸隔を理由として、ゴールドマン (Goldman 1983, 615) は「統計運動」という言葉は誤称であるとしている。また、プーヴェイ (Poovey 1998, 308) は、ケトレの「社会物理学 [=社会力学] 構想」はほとんどのイギリス人にとって理解不能であったと指摘している。

- Babbage, C. ([1864]1989) *Passages from the Life of a Philosopher*. In vol. 11 of *The Works of Charles Babbage*, edited by M. Campbell-Kelly, London: William Pickering.
- The British Association for the Advancement of Science (1833) *Report of the First and Second Meetings of the British Association for the Advancement of Science; at York in 1831, and at Oxford in 1832*, London: John Murray.
- The British Association for the Advancement of Science (1834) *Report of the Third Meeting of the British Association for the Advancement of Science; Held at Cambridge in 1833*, London: John Murray.
- Cullen, M. J. (1975) *The Statistical Movement in Early Victorian Britain: The Empirical Social Science*, New York: Harvest Press.
- Daunton, M. ed. (2005) *The Organisation of Knowledge in Victorian Britain*, Oxford: Oxford University Press.
- Goldman, L. (1983) "The Origins of British 'Social Science': Political Economy, Natural Science and Statistics, 1830-1835," *The Historical Journal*, 26(3): 587-616.
- Herschel, J. F. W. (1831) *Preliminary Discourse on the Study of Natural Philosophy*, London: Longman.
- Inoue, T. (2012) "Quetelet's Influence on W. S. Jevons." In *Subjectivism and Objectivism in the History of Economic Thought*, edited by Y. Ikeda and K. Yagi, London: Routledge.
- Morrell, J. and Thackray, A. (1981) *Gentlemen of Science: Early Years of the British Association for the Advancement of Science*, Oxford: Oxford University Press.
- Morrell, J. and Thackray, A., eds. (1984) *Gentlemen of Science: Early Correspondence of the British Association for the Advancement of Science*, London: Royal Historical Society.
- Political Economy Club (1882) *Minutes of Proceedings, 1821-1882, Roll of Members, and Questions Discussed*. In vol. 4 of *Political Economy Club, Founded in London, 1821*, London: Political Economy Club.
- Poovey, M. (1998) *A History of the Modern Fact: Problems of Knowledge in the Sciences of Wealth and Society*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Quetelet, A. and Garnier J. G. eds. (1828) *Correspondance mathématique et physique*, vol. 4, Brussels : M. Hayez.
- Quetelet, A. and Garnier J. G. eds. (1829) *Correspondance mathématique et physique*, vol. 5, Brussels : M. Hayez.

- Quetelet, A. and Garnier J. G. eds. (1830) *Correspondance mathématique et physique*, vol. 6, Brussels : M. Hayez.
- Quetelet, A. and Garnier J. G. eds. (1835) *Correspondance mathématique et physique*, vol. 8, Brussels : M. Hayez.
- Quetelet, A. (1831) *Recherches sur le penchant au crime au différens ages*. Brussels: M. Hayez.
- Quetelet, A. (1832) *Recherches sur la reproduction et la moralité de l'homme aux defférens ages, et sur la population de la Belgique, d'après le recensement de 1829*. Brussels: L. Hauman
- Quetelet, A. (1835) *Sur l'homme et le développement de ses facultés, ou essai de physique sociale*, 2 vols, Paris: Bachelier. 平貞蔵・山村喬訳『人間に就いて』(上下巻、岩波文庫、1939-40)
- Snyder, L. (2011) *The Philosophical Breakfast Club*, New York: Broadway Books.
- Sylvester, S. F., tr. (1984) *Adolphe Quetelet's Research on the Propensity for Crime at Different Ages* (translation from the second edition published in 1833), Cincinnati: Anderson Publishing.
- Todhunter, I. ([1876]2001) *William Whewell, D.D. Master of Trinity College, Cambridge: An Account of His Writings with Selections from His Literary and Scientific Correspondence*, 2vols. In vols. 15 and 16 of *Collected Works of William Whewell*, edited by R. Yeo, Bristol: Thoemmes Press.
- Wellens-de Donder, L. (1964) *Inventaire de la correspondance d'Adolphe Quetelet déposée à l'Académie royal de Belgique*, Brussels: n/a.
- Yeo, R. (1981) "Scientific Method and the Image of Science 1831-1891." In *The Parliament of Science: The British Association for the Advancement of Science 1831-1981*, edited by R. MacLeod and Peter Collins, Northwood: Science Review.
- 井上琢智 (1987a) 『ジェヴォンズの思想と経済学——科学者から経済学者へ』日本評論社
- 井上琢智(1987b)「イギリス社会科学振興協会とヴィクトリア中期の女性問題——APSS (1857-1886) の『会報』を中心として」『大阪女学院短期大学紀要』18: 59-88
- 井上琢智 (1988a) 「イギリス社会科学振興協会と経済学——『会報』を中心として」『経済学論究』40(2): 107-32
- 井上琢智 (1988b) 「イギリス社会科学振興協会——その歴史」『上ヶ原三十七年』久保芳和博士退職記念出版刊行委員会編、創元社)
- 井上琢智 (1989) 「イギリス科学促進協会 F 部会の歴史——新設 (1833) からイギリス経済学会の創立 (1890) まで」『経済学論究』43(3): 459-89

- 井上琢智 (1991) 「イギリスにおける経済学の普及と制度化——研究の課題と展望」
『大学史研究』7: 1-7
- 井上琢智 (2012) 「序章 古典から読み解く経済思想史」『古典から読み解く経済思想史』(経済史学会他編、ミネルヴァ書房)
- 井上琢智 (2013) 「統計熱狂時代と W.S. ジェヴォンズ——A. ケトレーを中心に」
『経済学論究』67(2): 125-43
- 江頭 進 (2010) 「19 世紀の統計学の発達と経済学——帰納と演繹の転換」『イギリス経済学における方法論の展開——演繹法と帰納法』(只腰親和・佐々木憲介編、昭和堂)
- 久保 真 (2006) 「ケンブリッジ・ネットワーク——リカードウ後イギリス経済学の伏流 1822-63」『経済学史研究』48(2): 67-83
- 藤塚知義 (1973) 『経済学クラブ——イギリス経済学の展開』ミネルヴァ書房